

獣医偏在 家畜系は不足

2017年7月5日

「加計新学部」に十勝の声 ペットに集中 養成制度見直しを

学校法人「加計学園」の獣医学部新設をめぐり、国内の獣医師の需給に注目が集まっている。地方では家畜防疫を担う公務員獣医師の確保に苦労しているが、全国への学部増設で問題は解消されるのか。国内有数の酪農・畜産地帯の十勝からは、牛などの産業動物に限った獣医師養成や現場組織の見直しを求める声が上がります。



高病原性鳥インフルエンザの検査。家畜防疫の最前線だが獣医師欠員が常態化している

欠員が常態化

家畜伝染病の予防やまん延防止、原因究明などを行う道の出先機関、十勝家畜保健衛生所（家保、帯広市川西町）。病性鑑定課の川島悠登さん（38）は3日、清水町内で鳥インフルエンザの防疫検査を行った。養鶏場への移動や採卵鶏の採血などで半日がかりの業務。検査は別の課の担当だが、職員定数から3人欠員しており、「現状で何とかやるしかない。縦割りでは仕事は回らない」と語る。

十勝家保は管理職をはじめ26人の職員全員が獣医師資格を持つ。家畜伝染病の多様化で業務が増える中、欠員はこの10年以上、常態化。獣医師1人当たりの家畜頭数は1万7775頭で、道内、全国を大きく上回る。

十勝は乳牛、肉牛それぞれ24万頭を飼育する一大生産地。全国的に乳牛など頭数が減少する中、頭数を増やして生乳生産をけん引している。家畜防疫について広尾町の酪農家（55）は「牧場が大規模化していて一度病気が出たら損害は大きく、風評被害も与えてしまう」と神経を使う。ただ、十勝家保の山口俊昭所長は「食の安定供給や安全確保の意味からも社会的責務は大きい、いる人員でやりくりしないとイケないのが実態」と頭を抱える。

処遇も要因か

こうした中の獣医学部の新設議論だが、現場では公務員獣医師や家畜を診る産業動物の獣医師確保にはつながらないとの見方が多い。

農林水産省の統計では、獣医系大学の卒業生の就職先は、ペットなど小動物の個人診療施設が5割弱を占め、公務員は18%、農業関係団体は10%以下にとどまる。帯広畜産大学でも進路は、産業動物と小動物がほぼ半数。産業動物分野は、就業環境が過酷で給与など処遇が低いことが原因の一つとみられる。

道内の家保14カ所の欠員は4月現在、計30人に上る。6月の定期採用試験でも、募集70人に対して応募は25人にとどまった。家畜の診療を行う各地の農業共済組合の獣医師も、人材不足は同様で、ホームページなどで常時募集している。

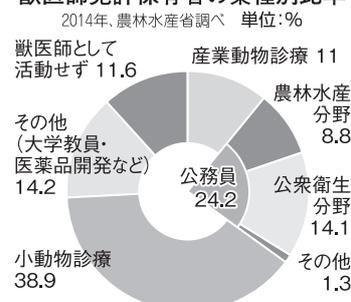
今回の獣医学部の新設議論について同組合の関係者は「家畜防疫を担う獣医が足りないから学部を増やすというのは短絡的。業種の偏在をなくす議論をしてほしい」と望む。道ではインターンシップなどで公務員獣医師への理解を広めているが、山口所長は「女性が働きやすい環境や給与などの処遇、組織体制の見直しなど小手先ではない対策も必要」と強調する。

家畜保健衛生所の獣医師1人当たりの管理頭数

2009年畜産統計などを基に道が作成

都道府県順位	獣医師数(定数)	1人当たり管理頭数
1 宮崎県	47	1万5342
2 鹿児島県	76	1万2504
3 北海道	183	8708
4 岩手県	60	7499
5 茨城県	48	7482
全 国	2181	4244
十 勝	29	1万7775

獣医師免許保有者の業種別比率



十勝地区農協組合長会の有塚利宣組合長は、産業動物を専門とする獣医学部の新設や、自治医科大学のように卒業後は地方で働く仕組みを課題解決の例に挙げる。その上で、都市と地方、業種の偏在解消に向けて、「農業団体としても現場で足りない産業動物専門の人材育成を要請していかなければいけない」と話している。